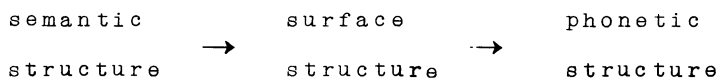


英語の語形成論における「品詞転換」 「派生」「屈折」の関係について

杉 浦 茂 夫

1 『英語学辞典』(研究社)は、「Conversionと似て非なのは派生(derivation)である」(圈点杉浦。以後この説を「非派生説」と呼ぶ)と述べているが、これに対して『新英文法辞典』(三省堂)、『英文法辞典』(培風館)(上記三辞典とも“Conversion”の項)は、「品詞転換は派生と類似しているため、ゼロ形態による派生と考える」学者のあることを紹介し、『英文法辞典』は、Bloomfield と Marchand の名を挙げている。(以後この説を「ゼロ派生説」と呼ぶ。)これらの一見相反するように思われる所説を出発点として、本稿では、品詞転換と派生がどのような関係にあるかを考察してみたいと思う。その考察の前提として、派生と屈折の関係を明確にしておくことが必要になる。派生と屈折が、morphology という用語のもとに、並んで用いられるようになったのは、Lyons(1968, p. 195) も指摘するように、最近のことである。古典的・伝統的文法においては、屈折は重要性を与えられていたが、派生はほとんどスペースを割かれることがなく、このことは、英語についての伝統文法家たちの著作にも反映している。派生と屈折には類似点が多いことは疑いのないところであるが、本稿では、従来の諸説を整理するとともに、服部四郎博士や国広哲弥氏による「意義素論」に基づき、併せてChafe(1970及び1971)の‘directionality’, ‘derivational unit’, ‘inflectional unit’なども参考にして、まず派生と屈折の関係を明確にし、次いで、その結果を利用して、品詞転換と派生の関係を考察したいと思う。

2 Chafe(1970, p. 55以下)は、‘...language is a way of converting meaning to sound’ という proposition を出発点として、概略次のような図式を仮定している。



変形生成文法の枠組みが、中心となるdeep structureから、semantic interpretation と surface structure へと、二つの違った方向へ進む図式で表わされるのとは対照的に、Chafe の考え方は one-way route を持つ点が特徴的であり、Chafe(1971)

では、‘directionality’ という用語を用いている。

さて、派生と屈折の関係をdirectionality from semantics to phoneticsのrouteに沿って検討してみよう。

2. 1. 意味構造に関連して派生と屈折の区別を考えてみよう。たとえば、派生によって表わされる<<agentive>><<inchoative>>などと、屈折によって表わされる<<past>><<plurality>>などとの間に、意味そのものとしての次元の相違を見出すことは可能であろうか。答は、明らかに否である。Marchand(1969, p. 209)は、citizensの-sと、citizenryの-ryは、共に、複数性・集合性を表わしており、概念構造はよく似ているが、実は違ったもので、その相違は文法機能と語彙的意味の相違であると論じている。文法機能を持ち出さない限り、-sと-ryの区別ができないということは、意味構造の次元だけで派生と屈折を区別することが、きわめて困難であることを示している。

2. 2. Chafeの図式の一番右端に位置する音声構造についてはどうであろうか。派生と屈折が被る形態変化について次のような一覧表を作ってみよう。左端の形態変化の種類については、Langendoen(1969, p. 128以下)に従う。

形態変化の種類	派 生	屈 折
(1) ゼロ	warm (形) → (動)	cut(現在) → (過去)
(2) 接 辞	red den	walked
(3) 内 部 変 化	hot → heat	run → ran
(4) (2) + (3)	long → lengthen	sleep → slept
(5) 補 充 法		go → went

warm (形) → (動)を認めたのは、品詞転換を派生の一部と考える、すなわち、「ゼロ派生説」を採る、ことを意味しているが、ここでは、後での結論を先取りしたことになる。もう一つの問題は、補充法による派生を認めるべきか否か、ということである。Langendoen(1970, p. 93)も指摘しているように、この決定にはある程度のarbitrarinessが伴うことは止むを得ないであろうが、彼がrise, raise; lie, layなどの対を補充法によるとしておきながら、次頁でhot, heatの対を母音変化によるとしたのはtoo arbitraryではないかと思われる。彼は、afraid, frighten; liquid, meltなどの対を補充法による例としているが、意義素の文体的特徴を考慮に入れば、同一語根による派生の場合と同一レベルで考えることは不可能であろう。筆者としては、Bloch and Trager(1942, p. 58以下)に従って、補充法は屈折

だけに限定しておきたい。

上の一覧表からもわかるように、音声構造の次元において、派生と屈折は、補充法によるものを除けば、全く同一の音韻変化を被っており、両者を区別することは困難であるように思われる。

2. 3. 意味構造や音声構造の次元では、上に見た通り、派生と屈折を区別することが困難であるとするれば、従来の諸説は、この両者をどのような観点から区別していたのであろうか。服部博士(1960, p. 35)などを参考にして整理をしてみると、概略次のようになるであろう。

- (1) 派生によってできた単語は、一つの形態素からなる単語と同じ機能を有するが、屈折によってできた単語は、それと機能が同じでしかも一つの形態素からなる単語がない。
- (2) 屈折は同じ品詞に属する(ほとんど)すべての単語に並行的に現れるが、派生は同じ品詞に属する単語の一部分にしかあてはまらないのがふつうである。

以上の二項目は、意味・音韻の次元を離れて、機能の面によるものであることが注目される。しかし、先に挙げた Chafe の図式のどこに、機能の次元は位置しているのであろうか。この点を探究するために、Chafe の 'derivational unit' と 'inflectional unit' を検討してみよう。

2. 4. Chafe (1970, p. 123) によれば、derivational unit とは、次の如き性質を持つ semantic unit である。

- (1) その unit の機能の一つは、あるタイプの lexical unit を別のタイプの lexical unit に変えることである。
 - (2) その機能に加えて、derivational unit はふつうそれ自身の意味を持つ。
- 彼が挙げている derivational unit には、inchoative, resultative, absolutive, causative などがある。

次に、inflectional unit とは、Chafe (1970, p. 168) によれば、次の如き性質を持つ semantic unit である。

- (1) lexical unit の選択に影響しない。(すなわち、past の有無は、たとえば buy という lexical unit の選択とは無関係である。)
- (2) lexical unit が既知のものになっても、余剰的にはならない。(すなわち、たとえば buy という lexical unit が存在するということが、past の存在・不存在については何も述べていない。

彼が挙げている inflectional unit は、動詞については、generic, perfective, progressive, past など、名詞については、definite, generic, aggregate, plural などであり、伝統的に屈折と呼ばれていないものも含んでいるが、動詞の past,

名詞の plural が含まれているのであるから、当面の議論に影響はない。

以上の所説から、Chafe の derivational unit と inflectional unit は共に、semantic unit であると同時に、その中に機能を含んでいることは明らかである。彼の図式の semantic structure は、意味だけではなく、機能も含むものと理解されねばならない。

2. 5. 「意義素論」によれば、意義素は、語義的特徴・文法的特徴・文体的特徴よりなるとされる。筆者としては、「だき合わせ特徴」⁽¹⁾（語義的特徴＋文法的特徴）を考えることにより、派生と屈折の区別ができるのではないかと思う。

派生と屈折の相違として、屈折は基体の品詞を変えることはないのに⁽²⁾、派生は、時には、基体とは違った品詞の派生形をつくり出すことが注目されよう。この事実をさらに深く考えてみると、派生の特徴の一つは、派生形の品詞を明確に指定することであって、基体の品詞が必ずしも限定されているわけではないという事実に気がつくであろう。たとえば、～ous が接尾してできる派生形は必ず形容詞であるが、基体は名詞 (dangerous) 動詞 (covetous) の他に、拘束形式 (jealous) であってもよい。したがって、上に述べた「派生は、時には、基体とは違った品詞の派生形をつくり出す」という事実は、基体の品詞と、派生によって指定される品詞が一致するか否か、といういわば偶然の結果にすぎないことになる。派生には、「品詞の指定」という機能があるのに対し、屈折にはそのような機能がなく、基体の品詞をそのまま保つという点が、最も根本的な相違であると考えたい。

派生のもつ「品詞の指定」という機能は、意義素の文法的特徴に該当すると考えられるから、Chafe の言う derivational unit は、「だき合わせ特徴」であり、それに含まれる文法的特徴により派生形の品詞が指定されるのに対し、inflectional unit は語義的特徴だけからなり、基体の品詞をそのまま保持するのだと結論したい。

3 派生と屈折の相違を、それぞれ「だき合わせ特徴」、「語義的特徴」の付加とする前章の結論に基づいて、品詞転換と派生の関係を考察しよう。品詞転換は「だき合わせ特徴」の付加により行われると考えることは、脚注(1)に示した拙稿において論じたように、十分正当性を持っている。したがって、品詞転換は基本的には派生と同じ過程であり、「ゼロ派生説」をとるほうが得るところが多いと思われる。しかし、上に述べた「派生は、時には、基体とは違った品詞の派生形をつくり出す」という事実は、基体と同じ品詞の派生形をつくり出すことも多いということをも意味していることに注目しなければならない。品詞転換は、文字通り、必ず基本形と派生形の品詞が違っているのに対し、派生はそうでない場合もあるという事実は、「品詞転換 = ゼロ派生」という等式を無条件に受け入れることはできないということの意味していると考えなければならない。すなわち、「ゼロ派生」

の中には、品詞の転換が行われない場合も含まれているということである。たとえば、次のような場合である。（「だき合わせ特徴」は《 》で囲み、～ を用いて、語義の特徴と文法的特徴のだき合わせられていることを示す。）

(1) grow¹ (verb) + 《causative ~ verb》 = grow²

e. g. Corn grows¹. → He grows² corns.

get¹ (verb) + 《causative ~ verb》 = get²

c. g. She got¹ a doll. → He got² her a doll.

(2) book¹ (noun) + 《reification ~ noun》 = book²

e. g. That book¹ is interesting. → That book² weighs half a pound.

(Bradley (1951, p. 185) による。同書には、これ以外にも例が多く記載されている。)

《causative ~ verb》と《reification ~ noun》を品詞を変えない「ゼロ派生」の例として挙げたが、両者の間にレベルの相違があることは認めておかねばならない。

Chomsky (1970, p. 218) は、

this book, which weighs five pounds, was written in a hurry
という文を挙げているが、この文のbook には、book¹ と book² が重なって存在しているのに対し、causative の場合には、主語と目的語の関係に変化が生じ、その変化によって使役化の生じたことが明確にされるからである。しかし、この両者は共に、品詞を変えない「ゼロ派生」（派生であることは、「だき合わせ特徴」の存在により明らかである）という点では共通点を持っている。

品詞転換と派生の関係は、したがって、「品詞転換＝ゼロ派生」ではなく、「品詞転換＜ゼロ派生」と考えるべきで、品詞転換と上のパラグラフで述べた場とが併さって、「ゼロ派生」に該当するというのが、本稿の結論になる。

参 考 書 一 覧

- Bloch, B. and G. L. Trager, 1942. Outline of Linguistic Analysis
(Baltimore)
- Bradley, H. 1951 (Reprinted) The Making of English (London)
- Chafe, W. L. 1970. Meaning and the Structure of Language
(Chicago)

- _____ 1971. "Directionality and paraphrase" Language
Vol. 47. No. 1
- Chomsky, N. 1970. "Remarks on Nominalization" In R. Jacobs
and P. Rosenbaum (eds), Readings in Transformational
Grammar (N. Y.)
- 服部四郎. 1960. 『言語学の方法』(東京)
1968. "意味" 『岩波講座 哲学 XI』に収録
- Langendoen, D. T. 1969. The Study of Syntax
_____ 1970. Essentials of English
- Lyons, J. 1968. Introduction to Theoretical Linguistics
(Cambridge)
- Marchand, H. 1969. The Categories and Types of Present-day
English Word-Formation (München)

— December, 1971 —

〔註〕

- (1) この用語は服部博士(1968, p. 331)が使われたものを、拡大してお借りしたものである。
- これについては、昭和46年10月23日、鳥取大学で行われた日本英文学会中四国支部大会の研究発表で詳しく述べた。また、その時の発表を基にして加筆した拙稿「品詞転換における基本形と派生形の決定基準について」は、『英語英文学研究』(第18巻第2号)に掲載の予定である。
- (2) Langendoen(1970, p. 161)に従って、Mary was surprised at herself. の surprised は、「動詞 surprise の過去分詞と homophonous な pure adjective」であるとする。さらに、our doings, human beings, willingly などの -ing は派生接尾辞と考える。これらの -ed, -ing は、初期の変形文法家の著作に見られる poss-ing, be+ing, be+en などで用いられるものとは別だと考える。

Summary

ON THE RELATION BETWEEN "CONVERSION", "DERIVATION" AND "INFLECTION" IN ENGLISH WORD FORMATION

The Kenkyusha Dictionary of English Philology asserts that 'Conversion' is quite different from 'Derivation' in spite of their similarity (henceforth 'non-derivation theory'). On the other hand, both Sanseido's Dictionary of English Grammar and Baihukan' Dictionary of English Grammar state that 'Conversion' can be considered 'Derivation by zero-morpheme' (henceforth 'zero-derivation theory').

This paper aims at examining these two contradictory theories and arriving at an appropriate conclusion.

In order to clarify the nature of 'Derivation', it will be profitable to compare it with 'Inflection'. In this article, therefore, the writer first inquires into the relation between 'Derivation' and 'Inflection' and then, on the basis of this inquiry, discusses the relation between 'Conversion' and 'Derivation'. The writer bases his view on Dr. Hattori's 'semantic theory', and in reference to Chafe's notions of 'directionality', 'derivational unit' and 'inflectional unit', introduces the notion of 'concomitant features' (i.e. a lexico-semantic feature plus a grammatical feature).

The conclusion of this paper is as follows: 'zero-derivation theory' is to be preferred, on condition that 'zero-derivation' be considered to include the case in which no shifting of word-class takes place in spite of the addition of 'concomitant features' (e.g. grow(vi) vs. grow(vt)).

Shigeo SUGIURA